

「インテリジェンス的観点から見た平成 JR 裏面史」

講師紹介：

- 1941年：大分県生まれ
- 1964年：早稲田大学第一政治経済学部政治学科卒業。同年、日本経済新聞社入社、東京本社編集局社会部所属。
その後：サイゴン・シンガポール特派員。名古屋支社報道部次長。東京本社社会部次長。
- 1989年：東京・社会部長。その後、人事局長。常務取締役、労務・総務・製作担当。専務取締役、代表取締役副社長。
2005年：テレビ大阪会長 現在：日本経済新聞社客員、日本交通協会会員

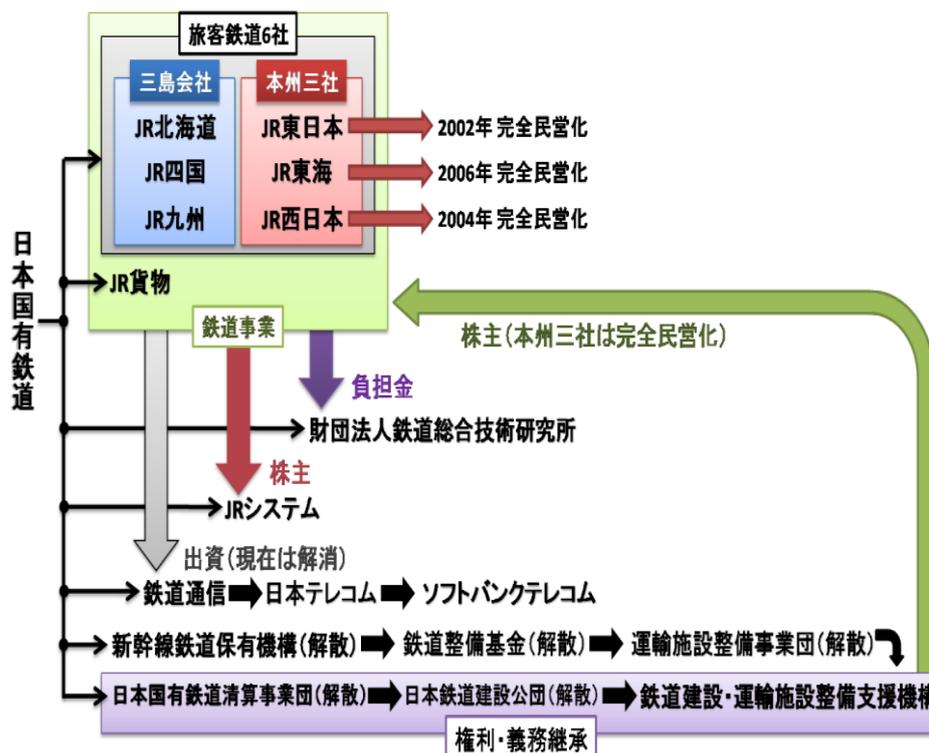
主な著書：

- 『サイゴンの火焰樹—もうひとつのベトナム戦争』、『安南王国』の夢—ベトナム独立を支援した日本人』
- 『特務機関長 許斐氏利—風淅瀝として流水寒し』、『不屈の春雷—十河信二とその時代』
- 『満蒙開拓、夢はるかなり—加藤完治と東宮鐵男』 (いずれも株式会社ウェッジ発行)
- 『昭和解体—国鉄分割・民営化 30年目の真実』 (講談社 2017年3月発行)
- 『暴君 新左翼・松崎明に支配されたJR秘史』 (小学館 2019年4月発行)

文責・新三木会 事務局
(第89回講演・参考資料を一部引用)

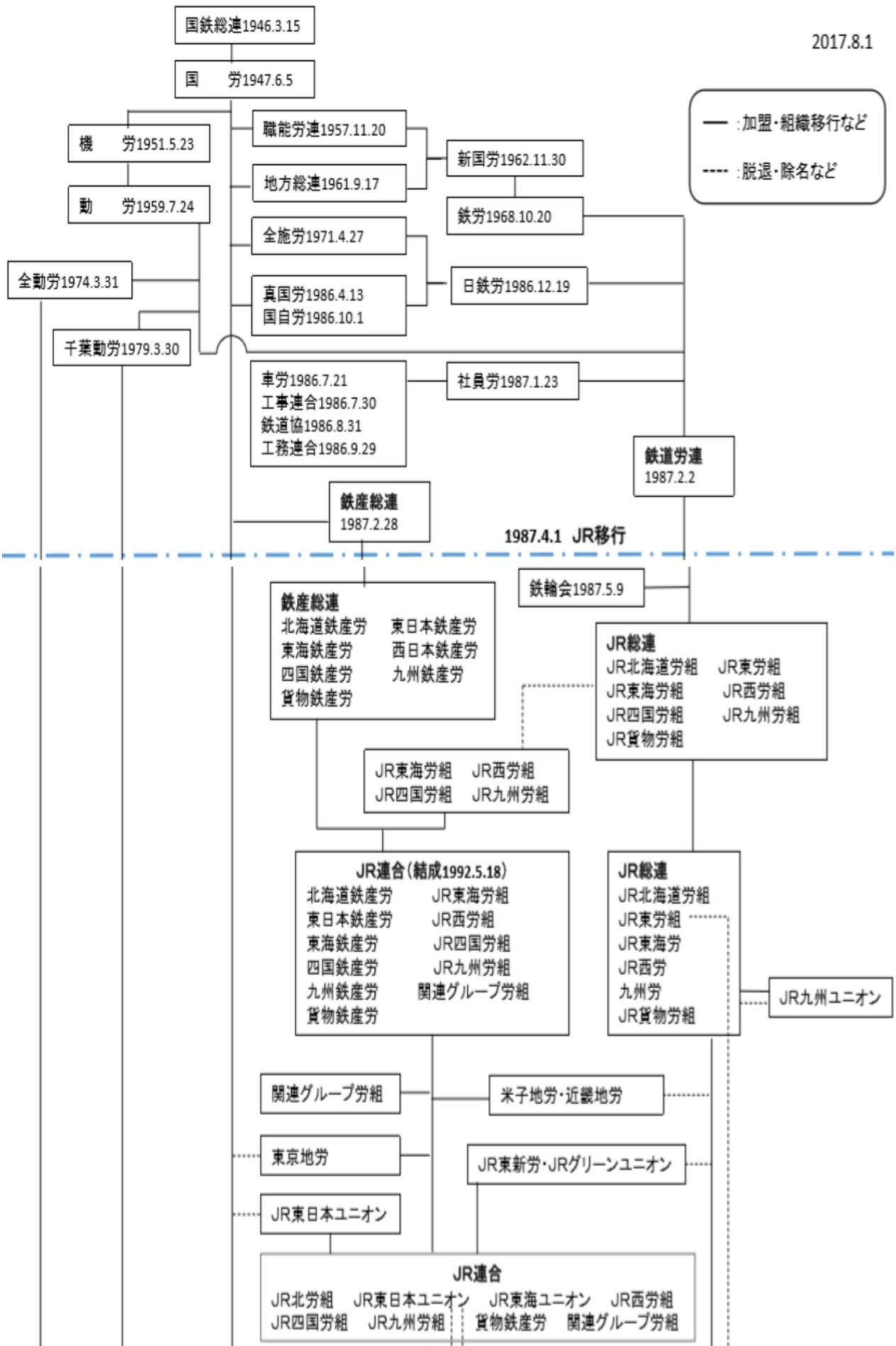
I プロローグ 国鉄分割・JR 誕生の経緯

参考図-1 国鉄分割民営化



参考図-2 国鉄・JR 労働組合の組織変遷図

2017.8.1



牧久氏著 『昭和解体—国鉄分割・民営化30年目の真実』（講談社 2017年3月発行、）

戦後昭和史の一大経済事件を描き江湖の関心を集めた表題の著書からそのポイントを得た書評を紹介し、本講演の主題のプロローグとしてご参考に供することとしたい。

書評1: 評者 保阪正康氏 朝日新聞 2017年6月3日掲載
書評2: 評者 野村進氏 週刊文春 2017年4月27日号 掲載
書評3: 評者 川面忠男氏

編集・文責・新三木会
(第89回講演・参考資料
本多幸吉編集より)

書評1: 保阪正康氏 対立となれあい、戦後の縮図 朝日新聞 2017年6月3日掲載

本書のタイトルはなぜ「国鉄解体」ではなく、「昭和解体」なのだろう。その思いで読み進むうちに単に日本国有鉄道や国鉄労働組合（国労）の歴史が昭和を代表しているだけでなく、革命の前哨戦のような光景を演じていたからだと気づかされる。

昭和24（1949）年に公共企業体として発足した日本国有鉄道は、戦後すぐは兵士として徴兵された青年たちや海外からの帰還者などを積極的に雇用した。当初は憲法でスト権は保障されたが、GHQ（連合国軍総司令部）の命令でこのスト権は禁止された。そして過剰な人員の解雇（9万5千人）をめぐる労使紛争やGHQの介入などに苦しんだ下山定則総裁の自殺（他殺説もあり）があった。昭和24年である。戦後の出発時から国鉄は日本社会の縮図ともいえたのだ。

さらに、収益性を無視して政治家の都合により路線をふやし、一方で「親方日の丸」意識での慢性赤字の事業体と化していった。その国鉄をどうするか、労働現場での組合管理に近い状態、それに抗する当局側との対立の中で、その方向性が次第に問われていく。とくに最盛期には50万人の組合員を擁した国労が中心になって現場協議制度が実施され、職場長の権限と権威は失われる。当局はこれに対して生産性向上運動との名目によるマル生運動で応じるのだが、メディアもこのマル生運動には批判的だったために組合寄りの報道が行われる。

赤字や職場規律の乱れがやがて行財政改革の対象となり、分割・民営化へと進んでいく。

著者は長年、国鉄の推移を見つめてきた元新聞記者だが、こうした国鉄当局と組合（国労のほかは動労、鉄労、全施労など）の対立やその裏側の労使なれあいの実態をえぐっていく。著者の筆は容赦ない。関係者の証言や史料をもとに、より具体的にそれぞれの場を語っていくのだが、つまりは莫大（ばくだい）な赤字を生む体質そのものに問題があると浮きぼりにする。国鉄当局の井手正敬、松田昌士、葛西敬之の三人組の改革派がいかにか分割・民営化を目ざしたか、仁杉巖、杉浦喬也ら歴代総裁の心情、国労書記長の富塚三夫など組合幹部の思惑を洗いだし、分割・民営化が主な潮流となっていく状況が説かれている。鈴木善幸内閣の行管庁長官・中曽根康弘が、その後、首相となって第二臨調のもとに民営と合理化路線を軌道にのせるプロセスも詳しく書かれている。

「昭和」の暗部を再びよみがえらせないための、この書の教訓、それは著者が本文中でなんどこにおわす〈権力の横暴と権力への媚（こ）び〉に対する怒りにあるのではないか。

書評2: 野村進氏 週刊文春 2017年4月27日号掲載

「富塚三夫」という名前を見て、即座にその顔を思い浮かべられる読者はまだ多いはずだ。日本最大の労働組合・総評（日本労働組合総評議会）の事務局長を長らくつとめた富塚のイメージは、重厚な労組官僚といったものであった。その富塚が料亭での密談で、みずから土下座する場面が本書には出てくる。当時の肩書きは国労（国鉄〈日本国有鉄道〉労働組合）の部長。土下座の相手は国鉄当局の職員局長である。「今後一切あなたのいうことを聞く」と懇願する富塚を見おろして、局長は、「富塚、お前（中略）徹底的にやろうじゃないか」と啖呵（たんか）を切る。すると、富塚は顔色を変え、「馬鹿にするな、俺は福島の水飲み百姓だ」激昂して目の前の膳台を料理ごと引っくり返し、仁王立ちになるのである。

かつて流布していた労使の“馴れ合い”という見方は、この描写だけによっても一変しよう。「国鉄」が「JR」に変わる過程の水面下では、こんな熾烈（しれつ）なやりとりが繰り返され、攻守と場所を変えながら、憎悪をつのらせていった。当局と労組の裏側でも、食うか食われるかの内紛が続いた。その一方、田中角栄と労組の重鎮が同郷の戦友で、始終ひそかに連絡を取り合っていたというのだから、話は一筋縄ではいかない。

私はつい、自民党・宏池会の事務局長をつとめた伊藤昌哉の『自民党戦国史』や、田中角栄の秘書だった早坂茂三の一連の著作を思い起こしたのだが、これらはいわば側近による回顧録であった。著者は違う。日本経済新聞の担当記者として両陣営に食い込み、地道な取材を重ねたアウトサイダーなのである。

国鉄の“分割・民営化”三十年目にあたる先ごろ出版されたこの大著には、中曽根康弘ら当事者への新たな取材も盛り込まれ、著者の言う「戦後最大級の政治経済事件」を日本のみならず世界の現代史に正確に位置づけようとする気概が滲（にじ）み出ている。分割・民営化の末、総評が解散した一九八九年（平成元年）にベルリンの壁が崩れ落ち、東西冷戦が終結したのは、決して偶然の一致ではない。

強大な労組の崩壊はまた、働く人々が分断され、裸同然のまま職場の寒風に晒（さら）される時代をも招いた。同業者としていえば、このテーマでの取材と執筆は困難を極めたはずで、複雑に入り組んだ人間関係や事の経緯（いきさつ）を、よくぞ読ませる物語（ストーリー）にまとめあげたものだと感嘆した。特に何らかの組織改革に直面している個人や集団にとっては、今後必読のテキストとなろう。

書評 3: 川面 忠男氏 :元日本経済新聞記者。 (牧久氏とは早稲田大学政経学部と日本経済新聞社で同期)

この「書評」は、川面氏の原稿をもとに新三木会事務局(文責 本多 幸吉)が、本参考資料のために書き直し、川面氏から承認を得たものである。以下の文章で、物故者は歴史上の人物として敬称を省略している。

3-1 著者が語る「昭和解体」

講談社が発行した牧久君の新著「昭和解体 国鉄分割・民営化 30 年目の真実」は、2017 年 6 月末で 1 万部を刷ったという。ページ数が 500、定価が 2,500 円、地味な内容にも拘わらずに、である。昭和解体という意味を考える人たちが少なくない、ということの表れであろう。

牧君は今回の著書について「国鉄解体 分割・民営化 30 年目の真実」というタイトルを考えていたが、講談社の担当が一読して「国鉄解体」ではなく「昭和解体」にしましょう>と言ったそうだ。牧君も国鉄の分割・民営化の動きを通じて昭和を語るつもりでいたので異論がなかったという。確かに「国鉄解体」では今さらに、という感じが否めないが、「昭和解体」となれば現代を繙く書になる。

日本の近現代史を振り返ると、日露戦争の勝利から昭和 20 年の敗戦まで約 40 年、それから国鉄が解体された昭和 62 年まで約 40 年、歴史は大きく変化した。国鉄解体とほぼ同時期に東西の冷戦が終わり、ソ連が崩壊してロシアなどに分れた。

それからほぼ 30 年が過ぎた。「平成は来年の 30 年で終わる。これからの 10 年で歴史は大きく変わる。今が変わり目だ」。牧君はそう言って米国のトランプ大統領の出現、中国の政策、北朝鮮問題、ヨーロッパの動向を挙げた。「いい変化になるか、悪い方向に行くか、わからない」。日本の未来がどうなるか、国鉄解体から 40 年というスパンで考える必要がある。

私は本書を読んだ時には、40 年スパンで考える歴史には思い至らなかったが、上述のような牧君の話を後から聴き、目から鱗という感じだった。



1987 年 3 月 31 日、国鉄最後の日。ただ一人国鉄の制服姿で杉浦享喬也総裁のあいさつを聞き、ハンカチで目頭
3-2 ㊦ をおさえる井手正敬(のちの JR 西日本社長)、その後ろは松田昌士(同・JR 東日本社長)

ノンフィクション作家・野村進氏は、同書はいわゆる権力者の側近による回顧録ではなく地道な取材を積み重ねたアウトサイダー>と著者を評している。牧君は国鉄の分割・民営を成し遂げた中曽根康弘元首相にも取材、あ

らゆる資料を見せてもらっている。「あとがき」で世話になった人たちの1人として日本経済新聞の同期の記者だった田村哲夫君の名を挙げている。中曽根氏の取材に際しては田村君が仲介の労をとった。田村君が中曽根氏に信頼される記者の一人だったことから中曽根氏も牧君の取材に全面的に協力したのだろう。

朝日新聞の5月28日付け読書欄に載ったノンフィクション作家・保阪正康氏の書評は次のように書き出している。〈本書のタイトルはなぜ「国鉄解体」ではなく「昭和解体」なのだろう。その思いで読み進むうちに単に日本国有鉄道や国鉄労働組合（国労）の歴史が昭和を代表しているだけでなく、革命のような光景を演じていたからだと気づかされる〉。国労書記長だった富塚三夫は亡くなる2か月前、牧君の取材に対して「国労は勝ち過ぎていた」と述懐したという。つまり、国労の闘争のやりすぎが国鉄解体、国労と国労が支える総評の消滅、ひいては社会党の凋落につながったのだ。

共同通信が配信した書評記事はジャーナリストの斎藤貴男氏が以下のように書き、西日本新聞、河北新報、京都新聞など9紙が5月28日までに載せた。

〈1987年に断行された国鉄の分割・民営化は、国労と総評、社会党をも崩壊させ、55年体制の終幕につながった。確かにあれは「昭和」の「解体」だったのだ〉。
国鉄解体を昭和の解体と読み解いた牧君はジャーナリスであるとともに歴史家になったとも言えよう。

3-3 「勝ち過ぎた」国労

本書は著者の牧久君が日本経済新聞の国鉄担当になったことが契機で世に出た。担当を離れた後も国鉄の動向に関心を持ち続け、多くの資料に目を通したうえ富塚三夫・元国労書記長、中曽根康弘・元首相ら当時の関係者に直接取材して上梓したものだ。

国鉄は累積黒字が4,000億円あったが、新幹線が開通した昭和39年に単年度赤字に陥り、牧君が国鉄担当になった昭和43年には累積赤字が膨らんでいた。国鉄当局は合理化対策として1人乗務員体制化を図った。蒸気機関車はかまを炊く助手が必要だったが、ディーゼル機関車、電気機関車になり助手が不要になった。

それでも機関士の動労（動力車労働組合）だけでなく車掌、改札係などの職員で構成する国労（国鉄労働組合）も反対闘争を展開、現場協議制度を勝ち取った。

現場協議制度は鉄道管理局長といった国鉄の幹部と組合との団体交渉ではなく駅長や助役を現場の駅員らがつるしあげるような話し合いだ。国鉄当局は団交ではないとしたが、事実上の団交で労働組合が国鉄を管理するような状況を呈した。

この現場協議制度は国労の執行委員だった細井宗一が編み出したものだ。細井は27年間、国労の軍師的存在だった。細井は旧制四高に入ったが、家が貧しく中退、予備士官学校を経て将校になり、招集兵の田中角栄の上官になった。同じ新潟出身で気も合い、田中が首相になった後も「田中君」、「細井さん」と呼び合う関係が続いた。

細井は大尉となったが、シベリアに抑留された。その当時、ロシア語を勉強し、共産党の聖書とも言われる「鋼鉄はいかに鍛えられたか」という小説を読んだ。帰還後は共産党員となり、田中角栄の「越後交通の社長になってくれ」という誘いにも応じず、国労の書記長にもならず、組合の戦術家に徹した。

国鉄は昭和45年、「マル生」と呼ばれる生産性向上運動を進めるが、水戸鉄道監理局幹部が駅長らに不当労働行為を煽っている録音テープが国会で問題になるなどして挫折した。

その後、国労は富塚三夫・元書記長が牧君に「勝ち過ぎた」と述懐したように勢いに乗って「国鉄解体」の原因をつくった。細井が誤算したのだ。国労の関係者の中には本書を読み、「われわれはなぜ負けたのか」と考えている人たちがいるそうだ。これは牧君から私が直接聞いた話だ。



富塚三夫



1975年11月28日池袋駅 スト権スト



1986年10月10日国労臨時全国大会。執行部の

3-4. 国労の誤算

国労の書記長だった富塚三夫は、牧久君の取材を受けた際、「国労は勝ち過ぎた」と言ったが、それは国鉄当局との闘争に対してであって国家・国民に対してはやり過ぎた。国労の軍師、細井宗一の誤算であり、国鉄解体の大きな動機になった。

憲法は団結権、団体交渉権、争議権の労働三権を保障しているが、連合国最高司令官だったマッカーサーの意向で国鉄は争議権が認められなかった。この争議権を認めさせようと組合は昭和 45 (1975) 年、電車をとめて国民の足を奪ったり物資が輸送できなくなったりするスト権奪還闘争を展開した。当時の三木武夫首相は条件付きでスト権を認める意向であったが、自民党の中曽根幹事長らが反対した。

国労の細井宗一らは最初の全国規模の 3 日間、続いて首都圏の 4 日間、さらに 3 日間の闘争を計画していたが、予想に反して要求が通らないため闘争の途中で築地市場の様子を調べた。電車、貨車が動かないにもかかわらず生活物資は搬入されていた。モータリゼーションが進み、鉄道に頼らなくてもよい時代になっていたのだ。そこで誤算に気がついた。

富塚は牧君に「加藤寛に裏切られた」とも言った。スト権問題を協議していた関係閣僚協議会の専門委懇談会で意見書を起草したのは加藤寛・慶応大学教授だったが、条件付きスト権を認めるというそれまでの考えを変えたのだ。

中曽根康弘氏は鈴木善幸内閣で行政管理庁長官となり、さらに首相となって第二臨調のもとに国鉄分割・民営化を推進させたが、加藤は第二臨調の部会長になって一役を果たした。

国鉄は累積赤字が増え、戦後は大陸の鉄道に従事していたものも受け入れたので職員が 63 万人に増えたこともあり、その年金も含めると 37 兆円の負債を抱えることになった。国鉄当局からも経営改革に動く勢力が現れた。井手正敬、松田昌士、葛西敬之の各氏だ。これら改革派と呼ばれる 3 人を含め国鉄のキャリア 20 人が分割・民営化の実現を図った。田中角栄元首相が健在であったならば国鉄の分割・民営化は進まなかったかもしれない。田中は「日本列島改造論」を著し、全国に鉄道網を張り巡らし、中央と地方の経済格差解消を図ると主張した。私も田中が「地方の鉄道の赤字は東京の電車の儲けで埋めればいい」と語るのを直に聞いたことがある。

中曽根氏は田中が失脚するのを待って国鉄の分割・民営化を断行したのである。



田中角栄 中曽根康弘



三木武夫 中曽根康弘



1981年7月10日第2臨時行政調査会土光
会長が答申案を鈴木善幸首相に提出

3-5 中曽根首相の意図

国鉄労組の「やり過ぎた」スト権奪還闘争があった昭和 50 年を契機に国鉄は分割・民営化に進まざるを得なくなった。中曽根康弘氏が首相になり、国鉄解体が決まった。「国鉄は潰れたのではなく中曽根さんが意図的に潰したのだ」と牧久君は言い切った。牧君は中曽根氏に直接取材し、資料も全面的に提供されている。そのうえで中曽根氏は社会党を支えている国労をつぶそうとした意図を明らかにしている。総評の中核だった国労をつぶせば社会党も弱体化すると考えたからだ。

労働組合は企業がなくなれば消滅せざるをえない。国鉄がなくなれば国労も存続しない。国鉄が北海道、東日本、東海、西日本、九州、四国に分割・民営化されると企業ごとの組合となった。国労、総評という組織はなくなり、社会党も社民党という小政党としてかろうじて形骸を残しているだけである。いわゆる 55 年体制は崩壊したのだ。

中曽根氏が率いたのは弱小派閥であり、田中角栄の支持を得て首相になったこともあり、田中が勢力を張っている間は国鉄の分割・民営化については口をつぐんでいた。風見鶏政治家だが、形勢をにらみながら政治を行うのは当然だという哲学もっていた。そうでなければ事は成就しない。田中がロッキード事件で有罪判決を受け、脳梗塞で倒れた後、国鉄再建監理委員会が分割・民営化に向けての最終答申を出した。こうした動向を風見鶏となって見つつ国鉄解体を図ったわけである。

こうした中で動労は委員長だった松崎明が組織を温存するため国鉄当局に妥協した。国鉄当局は鉄労、動労と雇用安定協約を締結したが、国労とは結ばなかった。国労は分割・民営化への対応で意見の相違から分裂してしまった。鉄労はむろん動労の組合員は分割・民営化後の新会社への移籍が円滑に進んだが、国労の組合員の中には最後まで移籍できない者が大勢いた。

鉄労、動労などは鉄道労連を結成するが、動労の実態は革マルであり、鉄労は3カ月で脱退、その後に解散してしまう。JR各社になっても革マルの勢力は保たれており、JR北海道の歴代社長4人のうち2人が自殺したということもその辺りと関係がある。

牧君は自著の「あとがき」で次のように書いている。<分割・民営化に協力した松崎明が率いた「動労」は、分割・民営化後もJR東日本を中心にその影響力を発揮し、経営にさまざまな影響を与えている。「分割・民営化」という国鉄改革は今なお「道半ば」なのである。>

以上

II その後のJR 労使関係

『暴君 新左翼・松崎明に支配されたJR秘史』 (小学館 2019 4月発行)

書評 1:	松本創氏 週刊文春	2017年6月27日掲載
書評 2:	永野 健二(ジャーナリスト)	2017年6月17日
書評 3:	川面忠男氏	2017年5月1日

書評 1: 松本創 「JRの妖怪」とJR東日本の30年の裏面史 週刊文春「文春図書館 6月27日」
まつもとはじむ/1970年、大阪府生まれ。新聞記者を経て、フリーライターに。著書に『軌道』誰が「橋下徹」をつくったか』など

国鉄では「鬼の動労」を率いて暴れ、分割民営化後は経営陣に深く食い込んで「JRに巣くう妖怪」と呼ばれたJR東日本労組の元委員長、松崎明。その一筋縄では行かぬ生涯を追うとともに、彼と手を結んで人事や経営への介入を許し、翻弄され続けたJR東日本の30年にわたる裏面史を描いた大著である。

松崎が、極左組織「革マル派」の副議長を長く務めた最高幹部だったことは、広く知られる。敵対組織に「潜り込み」、内部から「食い破る」運動理論は、国鉄改革で実践される。強硬な反対から突然賛成に転ずる「コペルニクス転換」を演じ、革マル派からの離脱を宣言。だが、これは組織を温存し、JR各社に浸透するための偽装だった。「悪天候の中、メンツで山登りするの愚か者」と語った松崎の演説は示唆的だ。

そして新会社が発足すると、JR東経営陣を籠絡し、労使協調を超えた「労使対等」を認めさせる。松崎の脅迫や工作に幹部が屈した結果だと長年見られてきたが、元社長の松田昌士(まさたけ)は、本書で驚くべき“本心”を語る。「松崎は革マル派だが、一切迷惑はかけないと誓った。その言葉を全面的に信頼した。彼は情と決断力のある人間だった」と。労組の専横を排除しようと決起した「国鉄改革三人組」の一人だった松田の、にわかには信じ難い変節。これこそ、「天使と悪魔が同居する」と言われた松崎の人心掌握術だろうか。一方で、反旗を翻す者や批判する者には、遠慮なく「鬼」の形相を見せた。

松崎支配を批判し、別組織を設立したJR西や東海の労組、その背後にいた経営陣を激しく攻撃。「葛西、君と闘う」と宣戦布告された東海の葛西敬之(よしゆき)は、不倫密会を尾行・盗撮される。東労組を脱退した組合員は徹底的にいじめ抜かれ、退職に追い込まれた。メディアも標的になった。批判キャンペーンを張った週刊文春はキヨスクで販売拒否され、後に続いた週刊現代は50件もの訴訟を起こされる。この「平成最大の言論弾圧」を通して、JR東労組批判はマスコミのタブーになっていく。

だが、絶対権力者となって労組を私物化し、革マル派の創始者である黒田寛一をも批判するようになった松崎の姿に、長年の同志も次々と離れてゆく。自らの独善に気づけず、「小スターリン」と化した松崎は晩年、寂しい句を詠む。生涯をかけた戦闘的労働運動も、気がつけば「潤れ谷」になってしまった、と。本書は、一人の労働運動家のピカレスク的な読み応えのある評伝であると同時に、戦後日本を席卷し、平成の30年をかけて終焉に向かっていった昭和型

労働組合の栄枯盛衰をたどったクロニクルでもある。そして、若き日に国鉄改革に立ち会い、ライフワークとして日本の鉄道史を掘り起こしてきた社会部記者が、積年の懸案を果たした“画竜点睛”の書である。

書評 2 牧久著『暴君・新左翼松崎明に支配された JR 秘史』を読む

永野 健二 (ジャーナリスト)

元日本経済新聞社証券部記者、兜クラブキャップ、編集委員としてバブル期の様々な経済事件取材する。その後、日経ビジネス編集長、編集局産業部長、日経 MJ 編集長として会社と経営者の取材を続け、名古屋支社代表、大阪本社代表、BS ジャパン社長などを歴任。単著に『経営者 日本経済生き残りをかけた闘い』、共著に『会社は誰のものか』『株は死んだか』『宴の悪魔 証券スキャンダルの深層』『官僚 軋む巨大権力』などがある。

「松崎明の死(2010年12月9日)の一ヶ月ほど前の2010年11月13日、60年安保反対闘争を牽引した中核派の政治局員北小路敏(きたこうじさとし)が敗血症のために入院先の病院で亡くなっている。松崎と同じく享年74。北小路はブント(共産主義者同盟)の活動家として60年安保闘争で全学連書記長に就任、東大生・樺美智子が死亡した『6・15国会議事堂突入』を指揮し逮捕された」

「(その後)革マル派を結成したのが黒田ひろしや松崎明である。松崎は革マル派副議長となり『理論の黒田寛一、実践の松崎』と並び称された」

「革マル派と中核派は、長年に渡って激しい抗争を繰り返して、内ゲバによる死傷者が続出する。松崎は(日本国営鉄道の組合の一つ、動労の委員長)として労働運動へ、北小路は大衆運動にとそれぞれ歩んだ道は違ったが、対立し続けた新左翼の中核派と革マル派の指導者として、一時代を築いたふたりのカリスマが相前後して鬼籍に入ったのである」「松崎と北小路の死は、内ゲバを繰り返しながらも『平成』という時代まで生き延びた新左翼運動のひとつの終焉を意味していた」「以下は、国鉄解体前後から三十余年に及んで封印されてきた、松崎明の生涯を軸に展開する、想像を絶する、複雑怪奇な平成 JR の裏面史である」

文章は、すべて、牧久著『暴君』の序章「天使と悪魔」一ふたつの顔を持つ男から引用した。ただし、それは、一読者として、筆者(永野健二)が選んだ極めて偏った選択でもある。

牧久の新著は、前作『昭和解体—国鉄分割・民営化 30年目の真実』(講談社)に続く彼のライフワークともいえる国鉄—JR 分割・民営化という日本の戦後史である。そして、マスコミの世界で長くタブー視され、牧自身、前作の『昭和解体』でも触れなかった動労=革マルについて、「松崎明とJR革マル問題」として真正面から光を当てた、日本のジャーナリズムの歴史に記憶されるべき快挙である。

それは、1941年に生まれ、1964年に日経に入社して、ベトナム戦争の最末期のベトナム特派員、日本経済新聞社の編集局社会部長を務めた、日本経済新聞社のエリート社会部記者が、30年後に選択した、ジャーナリストとしての落とし前でもあった。

牧はあとがきの中で、『昭和解体』を担当した編集者(講談社)の加藤晴之が「続編もあるのでしょうか」とぼつりとつぶやいた一言が、心に突き刺さったと述べている。雑誌界、出版界の稀代の編集者、加藤晴之が「牧さんは、(昭和解体では)松崎明問題から逃げた」と思ったのではないかと、述べている。

そして、牧自身、「私も、長年に渡って JR 革マル問題からあえて目を背けてきたのである。そのことへの苦い思いと強い反省が、この書を執筆する強い動機となった」と率直に記している。

私は、この本の著者、牧久の9年後輩として、牧氏が日本経済新聞社の編集局の記者、編集局の管理職であるデスク(部次長)・部長、そして、管理者から経営者に転じていく時期を、彼の背中を見ながら、追いかけてきた。入社年次のズレと、牧久が典型的な社会部記者であり、私が経済記者の道を歩んだこともあり、直接教えを受けた記憶はない。

バブルの最終局面、小谷光浩の逮捕をめぐる事態のなか、単独インタビューの取扱いを巡って、当時社会部長だった彼と、兜クラブのキャップだった私や、今はファクタの経営者でもある阿部重夫との間で、激しく対立したこともあった。

しかし、新聞社の組織として、ギリギリの判断をしなければならぬ局面でも、牧久は、常に、冷静かつ思い切りのいい編集者だった。与えられた制約のなかで、ジャーナリストとしてのスジを通し決断が出来る、マネジメント能力があった。

こうしたサラリーマン、組織ジャーナリストとしてのロールモデルを確立することが、私だけでなく、新聞社で働く組織ジャーナリストにとってもとても重要なことだと、当時から私は考えていた。

会社での仕事を終えた段階で、再び、ジャーナリストとして、良質な仕事をするところこそ、最後の重要な仕事なのである。50代にさしかかった頃から、私の目標ははっきりしてきた。そして、周囲を見渡してみれば、一人の先輩の生き方がロールモデルとして浮かび上がっていた。

誤解を恐れずにいえば、新聞社の記者、管理職、そして、日経の管理職から役員にいたる道の一つ一つを、評価するつもりはないし、様々な個別の毀誉褒貶に付き合うつもりもない。大切なのは、自分の出身母体でのサラリーマンとしての生き方と、その後のジャーナリストとしての活動の内容の吟味である。付け加えれば、生まれた作品に対する、読者としての素直な目線である。

ベトナム特派員時代を描いた『サイゴンの火炎樹』。ライフワークの国鉄問題の入口ともいえる『不屈の春雷—十河信二とその時代』。単著をほぼ一年ごとに出す牧の仕事ぶりに、驚かされただけでなく、ついには『昭和解体』(講談社)と『暴君—新左翼、松崎明に支配された JR 秘史』(小学館)という名著に辿り着く。

『暴君』に戻ろう。国鉄の分割民営化の物語には、様々な視点が用意されている。そのなかに、誰もが語らなかつた、語れなかつた物語があつた。国労、動労、鉄労という戦後史に残る、旧国鉄の組合問題の真相であり、分割の過程で明らかになる、JR 東日本、JR 西日本、JR 東海の、経営陣と組合が繰りひろげた、暗闘の真実である。

誰もが語ることを避けてきたのが、「動労＝革マル＝松崎明」問題だつた。誰も書けなかつたことは、牧個人の責任に帰すべきものではなく、日本の商業ジャーナリズムが抱える問題であり、日本人の忖度問題でもあつた。

中核—革マルの内ゲバに象徴される、暴力問題への恐怖と、週刊文春、週刊現代が穴を開けようとした、JR 東—動労問題、つまり旧国鉄から民営化 JR にいたるまで、変わらない、労使一体となつた、JR の経営圧力によって、戦後史に残る、言論弾圧問題は起つた。

牧久は、放っておけば、歴史の闇に消えていく真実を、ジャーナリストの責任感によって個人のリスクで描ききつた。牧久の文章には、様々な人びとの、戦いのあとや怨念が刻み込まれている。

2010 年 12 月に松崎明が亡くなり、JR の労働運動が大きな節目を迎えたことは紛れもない事実である。それが、牧の仕事を多少なりともやりやすくしたことは想像できる。孤独な戦いを続けてきた人たちの協力も得られることになる。

バブルの最終局面、昭和の最終局面に起つたメディア史に残る不幸な出来事を、平成、そして、令和にいたる 30 年の歳月が洗い流したともいえる。われわれ団塊の世代にとってみれば、1960 年代とは、動労＝革マルの時代というよりは、学生運動の時代、「中核」と「革マル」の内ゲバの時代だつた。

革共同中核派の北小路敏と革マル派の教祖、黒田寛一の対立の時代でもあつた。

そこに、革マルの資金源として動労が、「松崎明」が、妖怪のように徘徊して、隠然たる力を発揮していた時代があつた。そのことを理解している人は、当時、同世代には少なかつたと思う。

そのことの意味が、少しずつ分かつて来たのは、1973 年に、新聞社でジャーナリストとして働き始めてからだと言ってもよい。60 年安保世代の牧久と、70 年安保世代の私を含めた団塊の世代、わずか 10 年の世代の差による視点の違いによって、見える風景には大きな違いがあつた。

それを埋めることが出来たのは、良質なジャーナリズムによる、ミッシングリンク探しの旅だつた。

歴史的な視点といつてもよい。

JR 各社の経営者も関係者も、「革マル問題は命がけで闘つたものにしかわからない」と、歴史をいたづらな「タブー」によって覆い隠すことをやめ、良質なディスクロージャーで、会社の歴史に光を当て直す時期だろう。

この本は、そのための入口としての、究極のノンフィクションであり、同時に必読の「歴史書」である。

書評3 牧久氏の名著『暴君』について

川面 忠男氏 :元日本経済新聞社会部。(牧久氏とは早稲田大学政経学部と日本経済新聞社で同期)

日本経済新聞社の編集局社会部長、副社長などを務めた牧久君の名著が4月末に小学館から発行された。『暴君 新左翼・松崎明に支配されたJR秘史』が書名だ。一昨年の『昭和解体国鉄分割・民営化30年目の真実』の続編といつてよいもので、内容は旧動労の革マル派が国鉄民営化に協力するというコペルニクスの転回により勢力を温存、JR 東日本の経営に介入してきた事実をまとめた裏面史。その最高指導者が松崎明という人物である。

「暴君」というタイトルはいささか語弊があるのではないかと考えたが、読み進むと納得した。このタイトルを考えたのは牧君ではなく小学館の編集担当者のようだが、さすが餅は餅屋と感じた。

同書の裏表紙の帯を読んでみよう。「松崎明は、日本の労働運動が燃え上がった戦後昭和で、もっとも先鋭的で過激な活動を繰り広げた組合の闘士として当局の合理化(リストラ)に猛然と反発、「鬼の動労」の象徴的存在となつた。しかし、中曽根政権が進めた国鉄の分割・民営化に、組織を挙げて賛成に回り、大転換の先頭に立つ。松崎は『国鉄改革』の最大の功労者のひとりとなつたのだ。だが、彼には、もうひとつの顔があつた。非公然部隊を組織し、陰惨な「内ゲバ」で数々の殺人・傷害事件を起こしてきた新左翼組織「革マル派」の幹部でもあつたのだ。」

「第五章 盗撮スキャンダルと平成最大の言論弾圧事件」では松崎が「葛西、君と闘う」と言った後、葛西敬之 JR 東海副社長(当時、後に社長)が尾行されホテルで盗撮されたことなどが詳しく述べられている。革マル派の非公然組織が盗撮して写真週刊誌に提供したり、盗聴して怪文書を流したりした。これらの動きは松崎勢力と一線を画した葛西氏の追い落としを図つたものだ。

また週刊文春が JR 東日本管内の駅構内のキヨスクに一冊も並ばないという事態になつたことがあつた。これは松崎の

革マル派との関わりを追及するなど松崎の正体を暴こうとした記事が文春に載ったことからキヨスクで文春を扱わないことにしたり社内の中吊り広告を拒否したりして文春に圧力をかけたものだ。結局、文春側が販売部数の減少による経営悪化を怖れて折れた。

国鉄改革の3人組と言われたのは葛西氏、JR西日本の井手正敬社長、松田昌士JR東日本社長。井手氏も葛西社長と同様、松崎と対立したが、松田氏は松崎を受け入れて労働組合の経営介入を許した。

同書の表紙の帯を読んでみよう。「いじめ、脅迫、左遷、暴行、盗聴——平成最大の『言論弾圧事件』の真実を明かす」、「機関士に慄れた少年から『革マル派』最高幹部、JR東日本『影の社長』へ」、「巨大企業を恣にした『暴力と抗争』」。これらの刺激的な文言は言葉だけでなくその実情が本文の中で縷々述べられる。

松崎には金をめぐる不正疑惑も浮上、警視庁公安部が捜査に着手という事態も招いた。松崎は国内外に別荘や都心に高級マンションを所有していたが、その金の出所は松崎が支配する組合、その関係会社ではないかと疑われたのだ。これは送検されたものの経理処理がずさんだったことなどから決定的な証拠がつかめず検察側は公判維持が難しいとして不起訴処分にした。

週刊文春の西岡研介記者が松崎の疑惑を取材するが、週間文春での掲載を断念、週刊現代に移籍する。松崎側追及の記事を連載するが、松崎側は「精神的苦痛を被った」などと各地で訴訟を起こした。これはマスコミ各社の間に「触らぬ神に祟りなし」という風潮をもたらした。松崎勢力が言論報道に圧力をかける動きはそれなりに効果があったと言える。

JR東日本の社長が交代すると、松崎勢力と一線を画するようになった。労組内からも松崎を批判する勢力が表立ってきた。松崎は自分の秘書兼運転手を民主党公認の参議院議員候補に仕立て当選させる。これが裏目に出る。自民党から国会で革マル派が議員になっていると追及されるのだ。

結局、松崎の影響力は次第に弱まり、平成22年に本人が病死してしまう。

牧君の『暴君』で松崎を批判するマスコミ、出版などの動きが詳細に述べられるが、それらについて一般の国民はよく知らないし、また知っていたとしても記憶から薄れているのではないだろうか。同書は従来の報道、著作の内容を集成したものと言え、この問題に関する理解に役立つという意味で画期的な著作であると思う。

巻末の「松崎明関連年譜」を見ているだけで世の中の動きと革マル派の関係がわかる。松崎は平成7年(1995)にJR東日本労組委員長を辞職。平成13年(2001)には田中節警察庁長官、「革マル派がJRをはじめとする基幹産業に潜入している」と指摘。平成17年(2005)、警視庁公安部が「松崎らが組合の運営資金を私的に流用した」容疑でJR総連本部、東労組本部、松崎の自宅など一斉捜索、等々である。

著者の牧君は前著「昭和解体 国鉄分割・民営化30年目の真実」を世に出した時、編集の担当者が「続編もあるのでしょうね」とつぶやいたことを新著の「あとがき」で書いている。「その一言は私の心に突き刺さった」ことから「平成時代のJRの真実」を書こうと心に決めたのだ。そしてマスコミ業界がタブー視している問題に挑戦した。この話を耳にした時、私は日経同期の友人として牧君の身の安全を心配したものだ。

平成が終わる4月末に同書が発行されたわけだが、平成の裏面史を照らしたものとして意義ある書となった。

以上

新三木会

如水会内の講演会企画グループ NPO インテリジェンス研究所とは提携関係にあり、役員・講師・会員の交流あり。毎月第3木曜日 13時如水会館にて講演会を開催。累計107回、参加者累積18千名。

参加資格、如水会員とその紹介者、NPO インテリジェンス研 会員。参加費：毎回2千円、女性千円学生無料。

申込先：shinsanmokukai@gmail.com または 070-6994-0137 則松久夫迄

直近3カ月予定

7月18日(木)13:00～演題：『消費税と我が国の経済、財政について』講師：森信茂樹氏 中央大学大学院教授
東京財団研究主幹 元財務省財務総合政策研究所長

8月15日(木) 『昭和史から学ぶ教訓』 保阪正康氏 歴史家・ノンフィクション作家

9月19日(木) 『揺れ動く朝鮮半島情勢』 平井久志氏 ジャーナリスト 元共同通信社ソウル支局長